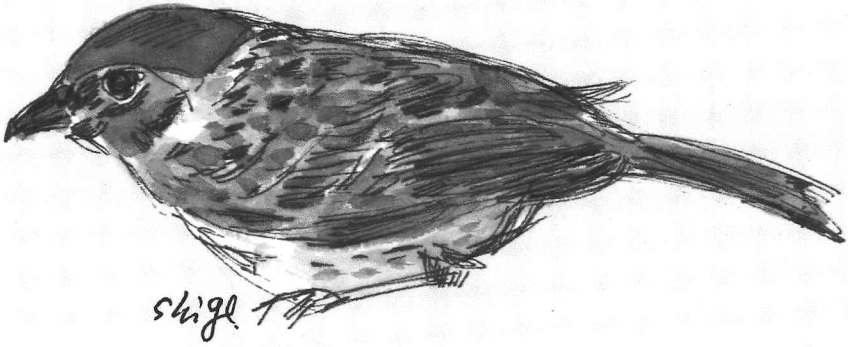
季刊　連句　第7号



昭和五十九年十二月一日発行

季刊連句　第7号　目　次

連句元年（南柏雑記5）…… 1

『付方自他伝』注解（下）……　東　明雅 …… 2

武翁　傳……杉内徒司 …… 6

春　山　文音四吟　(文)岡本春人
鈴木春山洞 …… 10

山荘の湯　捌東　明雅
(文)大畑健治 …… 12

絶頂の城　付勝練習歌仙 …… 14

武翁賞経過報告 …… 3　質疑応答…… 9

一泊二日三歌仙(箱根張行)……杉江杉亭 …… 16

第四回俳諧芭蕉忌…… 主催（第11回・猫蓑会）…… 18

「海くれて」五歌仙捌 東明雅　杉江杉亭　雑賀　遊　山口みづゑ　市野沢弘子

連句会案内 …… 21　雁帛往来 …… 21

表　紙（雀）岩満重孝

連句元年

南柏雑記 5

新しい連句の出発点を昭和四十五年（一九七〇年）とするのは、大畑健治さんの説（国文学解釈と鑑賞昭和五十八年二月号所載）であるが、言われてみるとなるほどと思う点が多い。大畑さんはその論拠として、「同年六月創刊の『すばる』誌上に、安東次男の『芭蕉七部集評釈』が斬新な文体で連載され始めたことと、同年四月に東明雅のいた松本市で芦丈三回忌が催され、昭和の連句復興運動が提唱されたことである。」と述べられている。

芦丈三回忌については暫らく措くとして、安東氏の当時の動静について、「俳句研究」（昭和五十九年八月号所載）の「現代における連句の意義」で平井照敏氏が「そういえば、安東次男氏が、丸谷才一や大岡信らと連句をはじめ、いまの詩人は孤独の仕事ばかりしていて、仕事が息苦しくなっているから、連衆の遊びをして、それをほぐすのだと、しきりに言っておられたのは、昭和四十年代の半ば頃だったように思う。」と言っておられるのと、さきの大畑さんの説と全く符節を合わせていると言ってよいだろう。

さらに、この当時、安東次男氏をはじめ詩人たちの気分を語るものとして、大岡信氏が「朝日新聞」（昭和五十九年八月十三日付）に次のように書かれたのが、きわめて印象的である。即ち「現代詩は、その発生の端緒である明治の新体詩以来、古典的詩歌伝統に対する異端者の立場に立って歴史をきざんで来た。とくに大正後半期以後、昭和戦前・戦後を通じ、現代詩を導いてきた重要な思想のひとつは、詩こそ文学・芸術全体のなかでたえず前衛的な位置に立つべきものであり、現に立っているのだという自負の念だったと言えるであろう。しかし、その自負の念は、一九六〇年代末期の大学紛争を重要な区切りとして、七〇年代以降の現代詩の世界からは静かに退潮して行った」

これが結局は連句を浮上させた世の大勢であった。そもそも、連句を復興させることは先師根津芦丈翁の悲願で、一生をそれに費されたと言ってよい。しかし、昭和四十三年（一九七八年）に九十五歳の生涯を閉じられた翁は、もう二・三年のことで、この連句復興の実況に接しられなかったのである。

『付方自他伝』注解（下）

東　明雅

6（打越）　薬のなづむ弥生つれなき　（自）
（前句）一言もいはで日中の御垣守　（他）
（付句）　こぼれ松葉を手にさぐり居る（他の会釈）

右の場合、打越は「薬がはかばかしく利かず、せっかくの弥生もちっとも面白くない」という自分の心中を述べているから、人情自の句である。それに対して前句は御垣守（御所を守る人）の動作を客観的に述べた人情他の句である。要するに自の句に他の句が向いあわせに付けられている。このような場合の付句は前句の人（御垣守）の動作をこまかに描写して、その御垣守が一日中一言もしゃべらず、こぼれ松葉を手にもてあそんでいるという風に付けてもよい。これを他の会釈（アシライ）という。

（打越）　薬のなづむ弥生つれなき　（自）
（前句）一言もいはで日中の御垣守　（他）
（付句）　ほろりほろりと屋根葺の塵　（他）

また、同じ自他の打越・前句に対して、右のように、前句の人（御垣守）とは全く別人（屋根葺）をもって来て、これも向い合わせ付けることもできるのである。要するに前句が他で、打越が自の句である場合、付句が前句に戻らぬためには、他の会釈を付けるか、全く別の他を付けるかしなければ、打越から転ずることはできないというのである。

7（打越）ひとつづつ手本囉（もら）うて粽（ちまき）ゆひ　（他）
（前句）　しかる局に笑ふ局に　（他）
（付句）よろよろと裾に莚の下向道　（他の会釈）

このように、打越と前句とが共に他の句として向い合わせて付けられている時は、付句はさらにその前句の会釈の句を付けることができる。これはもちろん他の会釈になり、打越から三句他の句が続くことになるが、最後が会釈の句ならば差支えない。そして、その三句とも、誰か別に見ている人がいるというわけである。

また、打越他・前句他とあった場合、自の句を向い合わせにつけることも可能である。

（打越）ひとつづつ手本囉（もら）うて粽（ちまき）ゆひ　（他）

（前句）　しかる局に笑ふ局に　（他）
（付句）染ぎぬを思ひのままに売おほせ（自）

これは、前句の局たち、機嫌のよい局もあれば悪い局もあるというのに対して、お出入りの商人が、商売物の染絹を思い通りに売ってしまった満足感を向いあわせに付けているのである。

8（打越）鯨突一二の銛をあらそひて　（他）
（前句）　無分別なる顔に雪降る　（他の会釈）
（付句）あのやうな小庵かなと思ふまで（自）

このように他の句に他の句の会釈が付いた時は、その会釈の句はどのようなものになり得るか、その点をはっきり見定めてから、いわばどのように見立て替えできるかをしっかり見定めてから、それに叶った自の句を付けるのである。この点が曖昧であると、二句がらみになり、変化がなくなって、一続きのものとなってしまうのである。これを「見出しの自むかひ」と言うのである。別の例をあげるならば、

（打越）　襷ながらに嫁のすり臼　（他）
（前句）櫛入れぬ髪にも艶は生れ付　（他の会釈）

このように前句はすり臼をひいている嫁の会釈で、その嫁が髪の手入れもろくにしないけれども生まれつきの艶があって美しいというのであるが、その櫛を入れぬ髪というところから、それを公事（訴訟）人の上のことと見定めて、次のような付句をする。

（付句）　あはれに成て公事がさばけぬ（自）

即ち、これはやつれても美しい公事人を見た奉行の気持を述べた自の句である。このように、前句の他の会釈をどのように見立替えできるか、ここが重要なのである。

以上、1から8までの付方が北枝が考えた付方自他伝の骨子である。彼はあと数例あげて特殊な場合の付け方を説

武翁賞経過報告

昨年六月創刊号で、武翁賞について発表して以来、一・二の応募作品をはじめ、猫蓑、A・C・Cの作品、あるいは個人の文音なども含めて検討して来たが、未だ「季刊連句」をリードするような新作品の出現はなかった。すべての作品がある程度まで完成していることは認めるが、真に優秀と目する作品がなかったのである。審査員三名相計った結果、「今年度は該当者なし」ということになった。残念であるがよい加減で妥協するよりはよかったと思う。

来年度は、諸兄姉の努力によって、真にすばらしい作品の出現を期待するものである。

昭和五十九年十月

草間時彦
杉内徒司
東　明雅

明しているが、これらはいわば、応用編であり、一応、基本的なものからは外してもよいと思われる。そしてその前に、北枝が言い落した大切なものが一つある。それは打越が他、前句が自の場合は、付句は自という法則である。そして、この項を補足したのが白雄の寂栞の中に出ているから、ここで掲出しておこう。

9（打越）巻わらに弟もむかふ手束弓　（他）
（前句）　うき世の中もたのもしき哉　（自）
（付句）西国をうてば都も旅なれや　（自）

これを加えて図表を作れば次の通りとなる。

	打越	前句	付句
1	人情自	人情なし	人情他（又は人情なし）
2	人情他	人情なし	人情自（又は人情なし）
3	人情なし	人情自	人情自又は他を付ける
4	人情なし	人情他	人情他又は人情自を付ける
5	人情自	人情自	人情他（又は人情なし）
6	人情自	人情他	人情他（又は人情なし）
7	人情他	人情他	人情自、又は他の会釈（又は人情なし）
8	人情他	他の会釈	人情自（又は人情なし）
9	人情他	人情自	人情自（又は人情なし）

さらに言えば、

	打越	前句	付句
10	人情なし	人情なし	人情自又は他を付ける

の項も補うべきだろう。北枝の時代までは人情なしの句は何句続けてもよかったようであるが、これが白雄の寂栞には、「人情なき句三句つづくはあしし」とはっきり否定されている。

これは人情なしの句ばかりでなく、人情他の句、人情自の句もすべて三句続いてもよいものはないのである。付方自他伝の真髄もそこにあるので、上に述べた図表などを苦労して暗記する必要は全然ない。要するに三句同じものが続かないように変化しさへすればよいのであるから、こんな簡単な理屈はないのである。

北枝の付方自他伝には、さらに次のような三つの特別な場合の付け方に対する説明がある。

A（打越）花守に花の短尺望まれて　（自ニモ、他ニモ）
（前句）　さても長閑に扨もうぐひす（時節）
（付句）水上は懺悔々々とぬるませる（他）

打越の（自ニモ、他ニモ）というのは、一句の中に、他の花守と、その花守に短尺を所望されている自と、二つがあってどちらとも決めかねる場合であるが、これを現代では自他半と呼んでいる。前句に時節とあるのもおかしく、これは当然人情なし、場の句と見てよい。右のように、自他半の句が打越にあり、場の句が前句に出た時は、自の句を

付けるわけにもいかず、また、花守を付けるわけにもいかないので、付近で水垢離を取っている連中の様子を付けて変化をはかるより手はないと言うのであって、これに類する場合も多いであろう。

次の二つの例は、図表の5の特殊な場合である。

B（打越）　身は雲水のさまざまな秋　（自）
（前句）笘舟に寝られもやらぬ闇深き　（自）
（付句）　女の声で迷ひ子を呼ぶ　（他）

即ち、「身は雲水のさまざまな秋」という句を舟の上での述懐と見て、「笘舟に寝られもやらぬ闇深き」と、淀の三十石舟を思い出させるような句を付けた時、その次は、必ず陸の上の人物と思われるものを向い合わせに出さなければならぬというわけである。「女の声で迷ひ子を呼ぶ」というこの付句は、前句の「闇深き」とひびき合ってよい付味であるとともに、打越の雲水からは大きく転じたよい付句であるが、この心得は舟のみに限らず、特定の印象ぶかい場所が前句に出た時は、打越からの変化について十分注意すべきであろう。

C（打越）編笠にしのげと夕日かかはゆき（自）
（前句）　おくれし連に心ひかるる　（自）
（付句）煙草の火くれて内儀は元の機　（他）

これを説明して、「かやうに連と出ても、そこに居ぬ人ならば、やはり自の句にして、他の句を向はせて付べし」と北枝は述べている。これも尤のことで、自他の解釈は大変難しいものであるから、よくよく一句の意をかみしめて判断しなければならない。

以上で付方自他伝の注釈を終る。はじめてこの文章を読まれて、付方自他伝に接しられた方は、なんと面倒な法則だろうと呆れられる方があるかも知れない。しかし、それは誤解であって、この付方自他伝の根本原則さえしっかり把握されれば、大変簡単なのである。その原則とは何か。

1　連句のすべての句を人情自、人情他、人情なしの三つに分ける（自他半のことはここでは省く）

2　人情のある句は一句で捨てず、必ず二句以上続けるが、その続け方は自と他とが打越にならぬよう注意する

3　人情なしの句は一句で捨てよく、二句までは続く。

この三つさえよく理解しておれば、付方自他伝のいう所もよく分かるであろうし、作品にすぐ応用できるのである。

最後に、この付方自他伝は何のために作られたかについて、考えてみたい。付方自他伝は三句の転じをスムーズにするための一方法にすぎない。三句の転じが十分にできる人ならば、この付方自他伝は不用である。その点で付方自他伝を式目と同一に考えるのは不可である。式目は連句を作る時の法則であるが、付方自他伝は決して法則ではない。だから、付方自他伝に背いても、三句の転じ、変化さえ付けられて居れば、それで十分なのである。ところが、初学の人は三句の転じと言っても分からぬので、付方自他伝を教えれば、最低の三句の転じを得ることが出来る。そういう便法であることをよくよく考慮しておかねばならない。また、付方自他伝にこだわる余り詩情を失なうこともある。琴柱に膠する愚を避け、自由に活用すべきであろう

武翁傳

杉内徒司

一

武翁は本名三井武夫、明治四十四年一月二十三日生れ、甲府市外竜王町出身。

大正五年四月慶応義塾幼稚舎に入学。普通部から、予科へはゆかず、芭蕉研究を志して昭和二年四月第一高等学校へ進む。同期に今も活躍している評論家・土屋清、俳優・山村聡がいる。

大学は、父（東京市電気局長）が、武翁の文学志望を許さず、止むなく東京帝国大学法学部法律科を選ぶ。その卒業の前年の五月九日、慶応普通部時代の二年先輩で顔見知りだった調書五郎（廿四歳）が、大磯町の酒田山で湯山八重子と心中した。

それが、広く世人の関心をひいて、「天国に結ぶ恋」という流行歌も生れ川崎弘子主演で映画にもなったが、その作詩者、西條八十が九年後、武翁の岳父になるのだが、それは「天国に結ぶ恋」の歌詞の一節のように「神様だけが御存知」で、彼が知る由もなかった。

学卒えて、昭和八年四月大蔵省に入り、銀行局に配属される。

昭和十五年四月二十四日、西條八十の娘嫩子と結婚。新郎三十、新婦二十二。

当時の風潮として、若きエリート官僚は上司の娘をもらうのが常だった。武翁が詩人の娘と見合結婚したのは、嫩子がとびっ切り美人だったせいであろう。

「主人はだいぶ出世の点で損をしたでしょうね、私のような詩人の娘をもらったのは」

と、日本詩人クラブ会長をされ、いまも美しい嫩子女史からある時私は直接聞いたことがある。

それから武翁はひたすら大蔵官僚の道を歩いた。後に事務次官となった舟山正吉の後任として金融局次長在任中、はからずもおきた昭電事件で、福田赳夫に殉じて彼は退官した。

二十八年八月、日本専売公社理事就任、二期つとめる。

三十三年七月農林中央金庫理事、三十五年五月から四十一年三月まで同副理事長。

農中をやめてからは、その頃新装竣つた国立劇場の理事。しばらくして日本開発銀行監事となったが、その在任中不慮の死をとげた。享年五十八歳。

不慮の死とは、故あって四十三年九月五日失踪、遺体となって十一月十八日発見されたのだ。

戦後高位高官の失踪としては、三笠宮妃の父高木子爵に次ぐ第二の事件として、その当時新聞・週刊誌に「謎の事件」と書きたてられた。

二

武翁が連句実作に手を染めたのは三十一年の冬のことである。

日本専売公社時代、一高時代の旧友二人を世田谷成城の自宅に招いて初めて試みた歌仙の表六句は左の通りである。

庭清く雪は残してありにけり　卓
　風なほ寒き世田谷の奥　武翁
今の世のめでたき女優隣にて　順
　羽根つく子等の袖の長さよ　翁
同じ家に行きあたりたり朧月　卓
　丁字の句三味線の音　順

（『朴の花』）

こんな稚い作品から出発した武翁は、農中時代無名庵十九世寺崎方堂の指導を受けたが飽きたらず、後都心連句会で信州伊那の根津芦丈の鉗鎚を受けるようになって、ようやく自律・開眼するに至った。

武翁が十三年間にものした一九二巻の作品は、連句に関する文章と共に、遺稿集『朴の花』（昭和四十五年十月刊）に収められている。

三

武翁が松本市在住の東明雅と出合ったのは、都心連句会主催の芭蕉翁二百七十回忌。それは昭和三十八年十一月九日である。

芭蕉の志すところを志す二人に忽ち深い友情が生れる。明雅の最初の大作『連句入門』の原稿に、武翁が丹念に朱筆を加えたりしたことも想い出される。

この『連句入門』は、時機が熟さず、ついに上梓されなかったが、その第一章「連句への招待」は私が創刊した『連句界』（第一号）（昭和四十四年十月一日発行）の巻頭を飾っている。

東明雅は武翁連句を次のように評している。

「武翁の連句は、非常にひろい題材をこなし得ている。ただ、強いて言えば、一句の切り取り方、トリミングがややあまいような気がする。一体に穏やかな句が多く、時に機智的で洒落れているのは、武翁の人柄のあらわれであろう。そして彼の連句の特色は、前句と付句との付味・付肌

にあるのではなかろうか。

（中略）

今日の連句の多くは、一句一句の面白さ、三句続きの物語的興味に重点が置かれ、前句との微妙な付味・付肌、そして三句目の転じなどは、軽視され、無視されているのではなかろうか。文学の制作・鑑賞に不易と流行があることは、夙に芭蕉の指摘した通りであるから、一句仕立の連句が流行する今日では、武翁連句の折角の付味・付肌も高い評価を受ける可能性はすくないかも知れない。

けれども誰が何と言おうとも、連句の文芸性の最大のものは、前句と付句との間に、かそけく通いあい、絡みあう付味・付肌にある。流行の風向きがまた変って、付味・付肌を重視するような時が来たら、武翁の作品のよさも、改めて見直されるだろう。

（武翁余焔『杏花村』52年11月号）

明雅は五十六年四月から今日に至るまで、朝日カルチャーセンターで「連句の理論と実作」を教えている。

明雅はこの講義で、しばしば、

「先師芦丈先生の教えられたことは……」

と話されるので、受講生はいつのまにか芦丈の名を憶えるに至っている。

この講座は半年が一コースで、この五年間に学んだ者は五十余人。

この連衆は「猫蓑会」という組織をつくって、教室外でも研鑽も積んでおり、この集団はやがて薫風連句の伝統を支えゆき、信州の片田舎の俳諧師芦丈は芦丈が存知もよらなかった連衆からも語りつがれてゆく事であろう。

余談だが朝日カルチャセンターでは、来春一月から名古屋市でも、美濃派の重鎮国島十雨を迎えて開講されるという。

芦丈に生前叙勲の話がおきて、地元信州、東京双方ですいせんの動きが始って間もなく、芦丈は病床に臥すようになった。何しろ九十三歳のご高令でもあった身だ。

この動きは病床の芦丈の耳にも入った。

芦丈は「勲章を貰う日のために寝床で坐る練習をされた」（小出きよみ『花野』）

これは生前ついに間に合わなかったものの勲五等叙勲の栄誉を享けたのは、主として高位高官の経歴をもつ三井武夫の働きによる。

この約四年あと、大磯の鴨立庵主をつとめた鈴木芳如に周辺から叙勲運動がおこり、やがて勲六等と結実した。

俳壇における功績において、根津芦丈と鈴木芳如との優劣の差は誰にもつけ難いが、この差はすいせん者の社会的な地位の差に基くものであろう。

東明雅は五十八年三月『季刊連句』を創刊する折、連句奨励のため賞を設けることを思い付き、それに武翁の名を付けた。それは武翁を深く悼む友情のあらわれであろうと私は感謝している。

感謝という意味は、私はその武翁にみちびかれて、俳諧の世界に遊べるようになった一人であるからである。

質疑応答

「自他無」と「場」の違い

問　新刊の『連句の楽しみ』（暉峻康隆・宇咲冬男著）に「自他半」を説明して、「一句の人物の意味が自分とも他人ともとれる句」としてありますが、この説明は「付方自他伝」の「自ニモ、他ニモ」に当るので、「自他半」というのは、自と他を含めた複数の人物を指すのではないのでしょうか。また、同書に「自他無」というのがあり、「場」との違いがわかりません。

夏の落葉の軒にはらりと　　場
湖借景に深みゆく秋　　自他無

（同書一八八―一九〇頁）

（東京都　馬場東夷）

答　自他半とは「二の尼に近衛の花のさかりきく」（冬の日）のように、自と他を含めた複数の人物を指して言います。「付方自他伝」に「花守に花の短尺望まれて」（自ニモ他ニモ）とあるのは、現在では自他半のことです（三頁参照）。なお、この外に一句として自にも他にも解される句があります。たとえば「日のちりちりに野に米を苅る」（冬の日）などは、一句としては自分で稲を刈っているとも、他の人が刈っているとも解釈ができ、打越・付句をよく参照して自他を判別すべきでしょう。

右は私が芦丈翁から受け継いだ伊勢派の考え方ですが、他門の教えは存じませんので、御質問に対し、全体的なお答えは残念ながら出来かねます。その点御了承下さい。

（東　明雅）

連衆名の表記について

問　季刊連句を拝見しておりますと、連衆名の書き方がまちまちなのに気付きます。正しい表記の仕方をお教え下さいませ。

（東京都　とく名希望）

答　連衆の名前は一巡までは名前を書き、それ以後は名前の下一字を書きます。女性名で何子と子の多い場合は、上の字を書き、三字名のときは一番上の字を書くのが普通です。

（東　明雅）

問　第十回猫蓑会四歌仙を拝見しますと、「野だいこ」とか「法界坊」とか、現在社会にあり得ないものが登場しますが、そういうことは許されるのでしょうか。

（神奈川県　北島千代子）

答　芦丈先生のお教えでは、「あるものはつく。ないものはつかない」ということがありまして、現在社会で使われていないもの、例えば「砧」とか「駕籠」とかは嫌うほうがよいでしょう。

「野だいこ」は、数少いけれども現存しています。

「法界坊」は前句が「拆の鳴りて」とあって、歌舞伎の場面であることが明確だったのでかまわないと思います。

ただ、前句が舞台でない場合、付句にのみ歌舞伎のようなものを登場させると、それはどんなことでもお芝居にすることができるので、芦丈先生はそれを厳しく禁じ、いましめられました。

つまり、歌舞伎もどきのものをつけると、すべて絵空事になり易く、そのまま流れてしまいがちのことをおっしゃったのだろうと思います。

（東　明雅）

春山

文音四吟歌仙

春山の山彦は朱髪童子かな　東洋城
水ほとばしる雪解の沢　春山洞
垣手入するも一人の業ならん　明雅
布巾をかけし茶布台の上　時彦
月に挿す薄の影のうつりつつ　春人
夜なべ終りて払ふ藁屑　洞
葡萄醸す香りを納屋にただよはせ　雅
思ひの外の美女でありけり　彦
金釘の裏を返せとなじる文　人
波音を聞く泊船の中　洞
鉄鉢に霰飛びこむ旅の空　雅
根深の汁の味噌が濃すぎて　彦
おふくろの継ぎの前垂めくらじま　人
涼しき月に屋根の青猫　雅
麦刈を了えし疲れのどっと出て　洞
八十過ぎての大手術なり　人
ミルクテイミルクたっぷり花の昼　彦
燻し銀なるペンダント春　洞

岡本春人

脇起歌仙「春山の」の巻が文音で十ヶ月かかってめでたく完尾したので、連衆が集ってゆっくり検討してみることになった。現在、文音による連句は随分巻かれて居るが、この様に校合することは、まだあまり行われていない様である。

文音では、一座して付け運んでゆくのと違って、どうしても通信は手間どったり、又その都度はじめからのを全部に亘って検討することが疎かになり、名人上手と雖も織疵や綻が生じるのもやむを得ない仕儀であるから、やはり磨きをかけることが必要なのである。

鈴木春山洞

連衆は有難い。長い文音の間に心暖まる情感が湧き漂っていて、校合に入って飛び交ふ言葉には、蟠りも衒いもなく、風雅から発せられる素朴な素直な誠の響きが籠っていた。

乗(ナオ)込を追ひて釣師の今日も来る　雅彦
汽車の鉄橋渡る近道　人
月見草ぽっかり富士の雲晴れて　雅
夏念仏の揃ふ声々　洞
豪商の淀屋闕所の噂立つ　人
千鳥啼き交ふ澪あり　彦
中年も初老も過ぎし恋ごころ　雅
何にも知らぬ女房は神　洞
跫音をしのばせ月の背戸を脱け　雅
露しとどなる桔梗刈萱　彦
法師蟬大名の墓列なれり　人
老も若きも交るジョギング　雅
疳癪(ナウ)を手酌の酒にまぎらはし　洞
腕の入墨消すべくもなく　人
年金を使はず貯めて死ににける　彦
雨も上がりてカーニバルなり　洞
まっしぐら花前線の北上し　雅
蝶の生まれて子規のふるさと　彦

首　昭和五十八年十一月二十六日
尾　昭和五十九年九月十六日

校合は巻くに要した時間の三倍はかかる（俗言）と囁かれるが、その至難のことが談笑裡に進行した。素晴しかった。全身変貌の大手術四ヶ所、半身に及ぶ手術八ヶ所。それが単なる表現の彫琢でなく、式目・付方・伝統的美的、現代的生活感情等の諸観点から、心ゆくまで校合されたのには、驚きと恐れを感じた。各折に四季を配した絢爛さの中で、秋季三月を検討して、その単調さを排して、14を夏月に転じ「月影照らす屋根の青猫」の朔太郎調が「涼しき月に」と俳諧すれば、直ちに連動して「不作田を刈り」は「麦刈りを終へ」と打てば応える。25「人の世はいろいろのことありて冬」という素晴しい述懐句が、18「ペンダント春」の先行表現に抵触という理由で姿を消す時、私は胸衝かれて涙が噴き出るような感動を覚えた。時彦先生の「中年も初老もすぎし恋ごころ」の独特の渋みある軽みに救われたが。またこの変貌で26 27に亘る恋の座の盛り上がりは圧巻となった。校合の全貌を発表出来ないのが残念ですが。春人・時彦・明雅の三先生の驥尾に附して――。

山荘の湯　東　明雅　捌

山荘の湯をまづ浴びて残暑尚　健治
　月を育むごとき夕風　海紅
蜻蜓舞ひ遊ぶ子供の影もなし　文人
　浜より帰る舟人の声　真彦
焼鳥につぎし熱燗舌を焼き　徒司
　重ね着の上頬被りして　明雅
減反の年の瀬きびし出稼ぎに　治
　上野の駅の町騒の朝　彦
先生のネクタイの色気になると　同
　どこかしほらしツッパリの恋　治
てらてらと手垢に光る百度石　司
　廃庵一つ残る山里　紅
夏の月水疱瘡をわづらひぬ　人
　目が明いてみる辛き世の中　同
リヤンピンをつもればリーチ即かけて　治
　離れの人が妙に気になる　彦
下駄の音生まれて花の雨に消え　紅
　淀んだ沼に泣きべその蝌蚪　司

大畑健治

機械文明が日常生活に滲透し始めてから、日本人の心は乾燥して砂漠化してしまった。こうした時代だからこそ、文芸は場当り的な笑いを提供するだけでなく、心に潤いをもたらす砂漠の中のオアシスとならなければ、文芸の存在する意味もなくなってしまうだろう。放送文化では、既に笑いだけを求める時代は去り、笑いの中に人生を考える時代に至っている。その延長を辿ると、恐らく文芸が次の時代に求める自画像は、心に潤いと安らぎをもたらすものではないかと思う。

このように、過去と現在を分析して未来を予測するのは、文芸研究者に与えられた使命でもある。かつて広田二郎氏は岩波の「文学」誌上で、研究者が桑原の第二芸術論に応えられなかったことを反省し、実作者たちに助言できるようにならなければならないと述べられた。また堀切実氏は、研究に豊かさを復活させるには研究者自身が実作体験をして、批評活動をしなければいけない、という。

連句界が新しい発展の可能性を求めているいま、実作者と研究者はお互いに基本的な立

爪切りて深爪になる遅日なり　彦
浮世之介に書きし誓文　治
逆さまに吊されたるは妻か何　彦
狸見つけし土肥の温泉　司
落選に父祖代々の家を売り　紅
帰るあてなき留学の画家　同
「ひまわり」の第三号は宇宙へ　治
眼を楽しませ肌をやく午后　司
ジャズダンス河童の如く跳びはねる　彦
襟巻トカゲ遠き故郷　紅
東京の砂漠に赤き月かかり　司
屋上に佇ち鳩を吹く夕　人
冬物を出す算段に秋たけぬ　司
渋茶を汲んで労いやし合ひ　人
而して愛用の杖ぼろぼろに　紅
神に祈りし辞書の出版　彦
大学の才子集めて花の宴　雅
毛深き胸を春の蚊が刺す　執筆
昭和五十九年八月十日　連衆
於　箱根中大湯河原寮　大畑健治
谷地海紅
二村文人
宮脇真彦
杉内徒司

場の相違を認め合って、実作的研究と研究的実作と実作即研究の比重の置き方の違いを考えて頂きたいと思う。

こうした見方からすると、既に実作と研究の両面において第一人者としての名を得ておられる東明雅主宰が、東京堂出版企画の『連句辞典』の編集責任者となられたことは、実に意義深い。現在の研究動向に弾力的に対応し、文芸性を問う研究姿勢で編集に臨もうとされる現われであろうか。

東明雅氏は二十代から三十代にかけての若手研究者を編集委員に抜擢された。ここにご紹介すると、

井上敦子　岩田秀行　塩村　耕　谷地快一
長島弘明　二村文人　三浦　隆　宮脇真彦
綿抜豊昭　（五十音順）

の各氏である。いずれも学界では将来を有望視され、研究会や研究誌で斬新な論を発表しておられる。これに私と杉内徒司氏を加えた十一名が編集スタッフである。

ここに掲載した作品は、去る八月十日に中央大学湯河原寮で編集委員有志によって巻かれたものである。実作を共に体験して、辞典の編集に生かそうということと、慰労と親睦を兼ねた楽しい合宿であった。

絶頂の城

付勝練習歌仙

東　明雅

投句締切
1月20日

絶頂の城たのもしき若葉かな　蕪村
夏鶯のこだまする渓　正江
枕蚊帳熟睡の夢の安からん　欅晴
啜る番茶に茶柱の立つ　東夷
捗らぬ稿にしらじら月さして　隆秀
新聞少年やや寒の道　たかし

七句目

治定　通草（あけび）の実供へてありぬ岐神（くなと）　貞子
次位　濁り酒供へてありし歓喜天　遊
佳作1金比羅の樽賽銭の祭らるる　一青子
2べったら市すれちがひたる傘の人　正雄
3蛇穴に入るを見たと言う話題　妙子
4黒猫便里の母から柿と栗　啓世
5僧院に歌ミサもるる聖徒祭　千町
6秋刀魚焼く向ふ三軒両隣り　隆秀
7蛸焼の香の漂へる御命講　たかし
8誰がためぞサフラン籠に摘む娘　和子

☆田園臭がないかわり濁り酒・歓喜天ともに前句の新聞少年にいささか付味が悪い。佳作の金比羅の樽賽銭は珍しい風俗でおもしろかったが、これも前句との付味が今一歩だった。2の「べったら市」はすばらしい情味のある句で、最初はこの句を治定しようかと思った位であったが、よく考えてみると、打越に月があるのに「傘の人」で雨が降っていてはまずいので残念ながら取りやめにした。3の「蛇穴に入る」もおもしろいがこれは仲秋の季語なので季戻りの可能性がある。4の「黒猫便」は折立にしてはいささか平凡、5は丈高く新しみありすばらしいが、僧院で内で入ったと思われるのが難である。6も折立としては丈の高さが足りない。7にもややその気味がある。8は全く恋の句、待兼の恋をあえて否定はしないし、サフランなど新しい季語があり、この句を治定したらまたおもしろかったかも知れぬ。9の七五三は冬の季語、七五三近しだから晩秋として差支えないという見方もあるかも知れないがいささか無理であろう。10は付味が大まか過ぎる。11も折立の句にはふさわしくない。12はそのままの景を詠んで、付味・転じは悪くないが、やや寒の道にまた街という字を入れるのはまずいだろう。その点13は同じ景ながらその難をのがれている。14はここで四足の動物を出したのはおもしろいが、「のそり」の気分が「捗らぬ」と通じはしないかと気にかかる。15菊人形ということは分かるけれども、表現に一工夫欲しい。16「面映く」が女学生の心の中とすれば、一句の中に自他の混乱がある。「面映げに」あるいは「面

9 七五三近し掃かるる神の庭　あかり
10 うぶすなの幟はためく秋祭　力
11 宰相が泣顔でくる文化祭　黄夜
12 シャッターを降せる街に銀杏散る　美保
13 残る菊店のシャッター降りしまま　哲
14 ゐのこづち被ぎてのそり太き犬　欅晴
15 人形の衿のやさしさ白菊に　みき
16 面映く赤い羽根挿す女学生　杉亭
17 朝露の女にゆるき宿の下駄　孝子
18 赤い羽根帽子にとめて馳けゆけり　淳子
19 コンバイン操る女晩稲田に　天留子
20 人も荷も沸いて秋高大市場　瑞枝
21 声哀し角を伐られし神の鹿　明声
22 二科展へ搬入の裸婦トラックに　正江
23 立ち出でてはや遠去りぬ秋遍路　麻子
24 秋蝶は浚渫船をかすめ行く　蓼艸

治定の句は、前句の新聞少年が馳けて行く道の辺の景、人情なしの句である。新聞少年がいかにも注意しそうな通草の実・岐神である点、付味もよく、また岐神で恋の呼び出しも兼ねている。打越が室内の人情自であったのに対しての変化も十分であるので頂戴した。ただ、通草の実や岐神などはいかにも田舎めいた気分がして、打越の句からやっと都会的になった気分をまたぶちこわしはしないかとも思ったが、折立としての丈も高いので一応これに治定することにした。次位の句は治定の句と狙いは全く同じで、☆映げ」とすべきであろう。17宿の下駄を借りて朝の散策に行く女性の姿態がありありと目に浮かんで来る。付味・転じ完璧で、この句を七句目に頂戴しようかと幾度も迷った。しかし、折立としての丈高さという点では、やはり「岐神」の方に分があると思ったので断念したが、この句を治定すれば、また変わった展開が見られたかも知れぬと思うと心残りのする句である。18は新聞少年の其人の会釈、軽い句であるが付味・転じもよい。19は新聞少年の向付で、早朝から働く人たちの風景、付味・転じともに無難であるが、やはり田園調のところが気になった。20は転じは物すごく利いているけれども付味がいかがであろうか。21はその反対に付味はまあまあであるが、「声哀し」が打越の気分から転じていないのが難である。22はおもしろい点に目を付けられたものである。都会ならではの新しさがある上に、裸婦像がトラックに載せられて行くところなど珍しい。この句も治定の候補作の一つであったが、なるべく一巡を果たしたいので断念した。23の秋遍路も向付、「遠去りぬ」という表現がいささか気になるがいかがであろう。24は近代味のある景色で詩情もあってよいが、秋蝶をもっと何か秋の鳥の名にでもした方が転じがよくはなかったか。

次の第八句目は、雑の句で人情なしでもよいし、人情ならば自の句でお願いしたい。そろそろ恋句でもよいところである。尚、今度の号から句の順番は、治定・次位の句を除いて到着順としたので御了承下さい。

一泊二日三歌仙

―箱根張行―

杉江杉亭

八月廿七日、箱根歌仙張行で湯本に着いたとき小雨がぱらついていた。

一行十人は早川川畔に面した名代の蕎麦處「初花」で自然薯入りの蕎麦を賞味した後、近くにある金湯山早雲禅寺（略称早雲寺）にある連歌師飯尾宗祇の墓を訪れた。

文亀二年七月卅日八十二歳でここ相模国湯本で没した宗祇の忌日が新旧暦の差違はあるものの二日違いというのも何かの因縁であろうと、一同感慨に耽りながら改めてややかたむいて苔生した宗祇の墓前に合掌し、境内にある

世にふるもさらに時雨のやどりかな

の句碑を見学した後、バスで今宵の会場である仙石原に向った。

仙石姥子の会場は故折口信夫博士が生前愛着して止まなかった旧別邸で現在は国学院大学叢隠寮となっており、樹木と草花に囲まれ、四囲の展望が開けて歌仙張行には申し分のない環境であった。ここをお借りすることができたのは加藤慶二先生のお骨折りによるものである。

今回の趣向は膝送りの二巻同時進行ということで嘱目二句を互選で選び夫々の巻の立句とした。

午後四時に始まった張行は夕食休憩の一時間を挟んで十二時前に無事二巻を満尾した。

翌廿九日は会場を同じ仙石原にある「箱根ハイランドホテル」に移して更に一巻を巻くことになった。

ホテルの前庭の大きな楡の木の下に白い椅子と白い円卓を設けて、昨夜とは変った雰囲気の中での張行であった。

昼食後はホテルのロビーに会場を移し、帰路の高速バス発車までの慌ただしい一刻の中で一巻を巻き上げた。

一泊二日三巻の歌仙を巻き終えて新宿行き高速バスの車中の人となり、箱根を後にしたのは山霧の出始めた午後三時半であった。

秋の声

やや傾ぐ宗祇の墓や秋の声　正江
しばし佇む葛の紫　麻子
湖畔亭月を仰ぎつたどり来て　彬風
姉妹二人で運ぶ取皿　杉亭
鰻を焼く匂ひ流るる遠くより　啓世
ちぎれるばかり犬の尾を振る　孝子
オーバーも買へぬ男とネオン街　和子
女殺しの胸の十字架　明雅
「核の冬」地球に黒き雨ふりて　K
峠の茶屋を守る爺婆　徒司
湧水にラムネ冷して懐しく　麻江
高速道路渋滞の列　司
副都心ビルの谷間を照らす月　亭
講座のあとの月の爽か　風
ひとり居にからびし雁の声もきき　孝
頭痛肩こり樋口一葉　世
花衣揃へて踊る幇間　雅
憲法記念日続く青空　和
春（ナオ）の富士見ゆる窓辺に画架を立つ　司
四半世紀をカント研究　K
無雑作にレインコートを着こなして　江
Kといふ名で恋文が来る　麻
はじめての言葉ばかりに肝つぶし　風

朝な夕なに髪を洗ふ児　亭
この夏は陸奥さへも猛暑にて　世
砂を蹴ちらすお社の鶏　孝
勲功を語り合ふ友一人減り　和
障子を貼れば匂ふ紙の香　雅
ミュンヘンの日本庭園月明り　K
国境越えて霧の流るる　司
荻の風昨日のことは過ぎたこと　麻
縄とびけんけん土間にひびかせ　江
お稲荷の横町抜ける煮物売り　亭
鯉が泳いで清くなる川　風
花くぐる時みなやさし糸桜　孝
ボールを打てば遠き霞に　世

秋の空

笠雲の切れて箱根や秋の空　孝子
七曲りする坂照らす月　和子
新生姜糠味噌桶に漬けこみて　明雅
ゼンマイ人形動かしてみる　K
藍染めの浴衣の模様御所車　徒司
蛇の脱殻長持の隅　正江
昼顔の不貞といふも夢の中　麻子
眉ほそく引き紅を濃く塗る　彬風
ナナハンを飛ばす男にすがりつき　杉亭
坂東健児校歌高らか　啓世
観音の納印帖をしのばせて　和
頭数だけ買ひし白桃　孝
山の端に月こそかかれ今宵だけ　K
西鶴の忌を修すカルチャー　雅
理髪屋の剃刀を研ぐ皮しなふ　江
音痴の父の軽い鼻歌　司
八幡の花は見頃と気もそぞろ　風
自慢の腕で作る草餅　麻
鮎に入る春の魚の賑ひて　世
句碑立ち竝ぶ義仲寺の庭　亭
サラ金に追はるるままに出でし旅　孝
満艦飾のトラックが行く　和
核反対声は寒風吹き通る　雅
ワープロで書く修士論文　K
貫ひたる肝油しゃぶれど効果なく　司
煉瓦の塀の高き網走　江
ひるがえる黄色いハンカチ廃坑の恋　麻
吸ひつけ煙草つけて流し目　風
宴会の窓越しに見る十三夜　亭
添水の音のひびく植込み　世
叢陰寮野面に満つる虫の声　孝
紫蘇おむすびのすこし酸つぱく　和
南極に残せし犬の物語　雅
お地蔵もあり脱衣婆もあり　K
花片をすくひすくひて狂はしく　江
子供あそばす陽炎の土手　司

爽かや　正江　捌

爽かや楡を木陰の小句会　明雅
白き庭椅子浮ぶ夕月　正江
薯蕷手打の蕎麦に味そへて　孝子
深き湯呑みに八分目のお茶　和子
宿の子はままごと遊びきりもなし　麻子
緋鯉の泳ぐ山峡の川　K
銀盃草良寛堂に群れ咲きて　啓世
紬織る娘の細き二の腕　和
板前の青き剃跡片たすき　杉亭
カーステレオのジャズで抱きあひ　彬風
十字路をよぎれば海がまなかひに　孝
住吉大社神守り受く　和
衛兵の剣に冴ゆる尖り月　K
煖炉の上の黒猫の髭　雅
もうかると株式投資もうからず　和
怪我にはいつもメンソレータム　世
花冷えのゴルフに集ふ姥子の湯　孝
地虫穴からちょと顔出す　和
春眠の寝床の中であとすこし　亭
百日行の明けて住職　孝
生卵ひとつ添へたるかゆの膳　麻
ナツメロ唄ひ涙して和す　徒司

恋人の噛みし小指の傷消えて　K
梨園新派の色の立引　亭
はつたいに咽せて汚せし革蒲団　世
スリと過せし巴里祭の街　雅
コンコルドいづくの国へ飛び去るや　風
甘党辛党左右両党　同
老二人ベンチに憩ふ初月夜　亭
胡桃落ちたる音を言ひあひ　麻
教会の鐘ひびきくる秋たけて　K
すぐに崩れる騎馬戦の馬　和
中学生女まさりの男あり　雅
ふかす煙草の烟目にしみ　同
まれ人の旧居訪ねん花の頃　江
ホテル出れば囀りの中　司

第四回俳諧芭蕉忌

十月十七日、東京都近代文学博物館にて芭蕉忌を修し、首尾した『海くれて』（脇起り）五歌仙を芭蕉翁にささげた。

参加者廿九名　合掌。

（第十一回猫蓑会）　幹事

海くれて　東明雅　捌

海くれて鴨の声ほのかに白し　翁
時雨霽れたる空の夕月　明雅
厨辺に冬至菖蒲ちぎりゐて　和子
帰りし子等の話聞きをり　てるよ
ひらひらとコップ一ぱい水中花　貞子
上布の袖を吹き通す風　啓世
賑やかに縁台将棋始まりぬ　甲子郎
ちよつと様子のよき男なり　和
気の利かぬ人のつき来て言ひそびれ　世
ベニスの運河横道もあり　貞
手作りのワイングラスの赤き旅　よ
椎の実ひとり落ちる音聞く　貞
月の面よこぎる雲の一とぎれ　甲
十夜参りの婆の玉数珠　和
ろくろ首傘小僧大入道　同
新しくなる鎌倉の駅　よ
滝桜七百年の花枝垂れ　世
草餅を売る店の二代目　貞
ピカソ展出てくしやみする春の風邪　同
監視カメラに写る後身　和
エンゼルよ教へて欲しい悪い奴　世
逢ひたいは色可愛いいが癪　和
老いきざすベーゼ仁丹匂ひ来て　世
蔓バラ薫る公園の午后　甲
祭笛遠く近くに流れつつ　よ
紅き茶淹れんたぎるサモアル　世
億の金コアラ獣舎の出来上り　よ
たつた二枚の障子貼る人　和
秋狂言終へて子役をおぶふ月　同
角を曲れば秋刀魚焼く香が　テル
残菊をつい己が身にひきくらべ　和
総裁選に候補続々　同
門構へ玄関式台車寄せ　よ
手帖たしかめ明日の約束　貞
花の雨濡れし衣を乾かして　雅
双体神は若草の中　ル

海くれて　杉江杉亭　捌

海くれて鴨の声ほのかに白し　翁
小舟の上であぶる新海苔　杉亭
仕事部屋額を掛け替へ湯気立てて　徒司
古きシャンソンロずさむ人　美保
金の輪をかすかに見せて若き月　千町
庭のベンチに木の実ころころ　隆秀
栗飯をたべる嫁女のとんび足　司
土蔵のかげでそつと寄り添ひ　保
この胸に揺れる分別無分別　町
手話で話せば尻尾ふる猫　司
共作の推理小説売れに売れ　秀
はしご酒する飲屋横丁　保
月の道走りて汗のゴールイン　司
うなぎ・だぼはぜ・ざりがにのごと　秀

千年を御足の下の天邪鬼　町
　丸めて捨てる凶のおみくじ　同
花笠をかむりて踊る町内会　秀
　黄色の蝶の飛び交ひてゆく　保
たまゆらの城あらはれし蜃気楼　司
　一角獣よ吾が夢に来よ　町
反核の抗議締め出す盾の列　司
　サッチャー首相命拾ひし　秀
ここかしこ氷柱のさがるビルの窓　保
　かき鍋囲む老いし戦友　保
同じこと繰り返しては泣き笑ひ　秀
　ピンクビラ貼る電話ボックス　保
昼下がりよろめき渡る恋の橋　司
　大波小波縄をとぶ子ら　同
車庫に入る最終電車照らす月　保
　集ひきたれる屁ひり虫など　同
ほそぼそと芒木蒐売る媼　秀
　親の代から「みすず飴」すき　町
躁となり鬱となりたる昨日今日　司
　当てにしている神のお許し　秀
高遠の絵島の館花吹雲　町
　行方遥かに陽炎の立つ　亭

海くれて　雑賀　遊　捌

海くれて鴨の声ほのかに白し　翁
　冬めきて見ゆ船の灯火　遊
厨窓いつも貝割育てゐて　淳子
　開かれしまま画帖置かれる　正江
山の端にはやかかりたる二日月　正雄
　花野に続く庭に住みつく　天留子
そぞろ寒つづれさせてふちちろ聞く　淳
　紅さす仕草見馴れたる仲　遊
つぎつぎと男を捨てて又拾ひ　雄
　ひとたばの髪埋まる塔頭　江
ハイウェイ鎌倉街道踏み跨ぎ　雄
　空缶投げて若者ら過ぐ　天
月の下髭むくじゃらの西瓜番　江
　やつがれの罪おみのがしあれ　遊
酔ひ痴れるキッチンドリンカー　天
　持てあまし　遊
　知らん顔して眠りをる猫　淳
花幾重吉野の里のこもり堂　淳
　鼓打つなり陽炎へる縁　天
行く春の釣人路地を曲りくる　江
　西に東に現れて毒菓子　雄
ケイサツハナニシテンノヤとおち　遊
　よくられ　遊
　ケセラセラセラなるやうになる　淳
臨月を控へ相手を定めかね　江
　恋の終りに得しものはこれ　淳
なぐるける夫婦喧嘩をくり返し　雄
　トラベルミンの効目なかなか　江
ゴビ砂漠夢深かりきミイラの妃　天
　カナートに掬む水を飲み合ひ　江
月明り『ヴアイオリン弾き』屋根の上　天
　踊るともがら輪のひろがりて　雄
秋海棠風ともなくて露こぼす　淳
　ラジオ体操力いっぱい　雄
焼立てのパンにバターをたつぷりと　淳
　片足跳びで学校へ行く　天
三面鏡満開の花写しをり　遊
　前栽春の気色整ふ　天

海くれて　山口みづゑ　捌

海くれて鴨の声仄かに白し　翁
　灯影の洩るる風除の芦　みづゑ
春隣里のなまりのやはらかに　東
　くくれ顎して縄飛びの子等　瑞枝
廻転のラウンジにをり望の月　郁子
　新栗の菓子買つて帰らう　麻子
岸壁に鯊釣の竿並びたり　一青子
　一銭五厘の兵たりし友　麻
婆にして離婚願望症候群　夷
　ひとりよがりの酒苦くなる　麻
グリコとはお手あげといふ流行語　郁

太鼓どろどろ黒子右往左往　枝
馬冷すせせらぎ浅く繊き月　一

昨日も今日もぼんやりと過ぐ　同
吾等かく亡ぶを見よとヴイスコンティ　枝

円柱高く立ちならぶ丘　麻
笙の笛みやびにひびく花御堂　夷

綿飴車まわす永き日　枝
しやぼん玉αβに飛ばす人　一

虹がしきりにまつわりて来る　夷
知らぬ間にビニール傘のまたふえて　麻

鍵渡したる数は内緒に　麻
イヤリングの男ベットに胡座かき　ゑ

寸借詐欺に鼻毛抜かるる　夷
懺悔文朝夕誦して冬深む　郁

丸々胸をふくらます鳩　夷
若島津綱取り目ざす場所迫る　一

天塩振つて落鮎を焼く　枝
黒猫の金の目光る月明り　郁

みんな持つてるすすきみみづく　同
萩の庭こぼれしものを積みためて　郁

招待客の席を定める　麻
甲比丹の南蛮屏風のうれひ顔　一

山々笑ひ雲浮びをり　枝
花びらを折目疲れし地図に受け　夷

くまがい草のふくらみし夢　麻

海くれて　市野沢弘子　捌

海くれて鴨の声ほのかに白し　翁
風をめぐらす大寒の松　弘子

冬座敷親しき顔の揃ひゐて　あかり
封筒開き写真散らしぬ　孝子

憧れの月のロケット子等の乗り　彬風
籠の鈴虫髭をふりつつ　みき

秋簾衣桁にかけし男物　喜久子
傘も持たずに出づる口惜しさ　孝

赤坂にフランス料理の店開く　き
マロニエの花咲きしアベニュー　風

病める娘の絵筆進まず月涼し　喜
世を騒がせて送る毒薬　孝

識者とは知つたかぶりと聞きてをり　き
餅は餅屋にわれは厨に　り

女から女に伝ふ竈の火　風
影おぼろなり下京の辻　孝

山寺の法事の知らせ花曇り　喜
生れし蠅をしたたかに打つ　り

反核を掲げて高しメーデー歌　孝
振り返り見る路地の三毛猫　喜

叱らるる覚悟初めてパーマかけ　風
神の御留守にはしやぐ悪餓鬼　孝

見世物のお化け屋敷に時雨降り　り
番の鳩に又一羽来て　喜

ワシコフにかしづく女身の細く　孝
縒りのもどればさらに睦まじ　風

逆さまに街の見えしは錯覚か　り
落ちゆく鮎の夢のはかなき　孝

月澄めば命をこぼす砂時計　孝
石突き残し松茸をもぐ　り

南北の朝鮮和む板門店　風
酒つぎ回る翁賑やか　り

町会に顔だけ出して出たことに　き
群雀たつ昼の井戸端　喜

旅の荷を解くやどつと花疲れ　弘
ぽんとはじいてゆらす風船　き

著　雅明　東

夏の日　角川書店（絶版）700円
連句入門　中公新書508号　価380円
芭蕉の恋句　岩波新書91号　価320円
猫蓑　永田書房　価2300円

連句会案内

○連句教室　会費千円
日時　第一日曜日午後一時―五時
会場　関口芭蕉庵
　　文京区関口二ノ十一ノ三
　　（電）九四一―一一四五
○A・C・Cゼミナール
日時　第二・四水曜午後一時―三時
会場　新宿住友ビル四十八階
　　朝日カルチアーセンター
　　新宿区西新宿二ノ六ノ一
　　（電）三四四―一九四一（代表）
入会金　五千円
受講料　一万一千四百円（三ヶ月）
　　二万二千円　（六ヶ月）
○猫蓑会（会員制）
年四回
（一月　四月　七月　十月　第三水曜日）
会場　松声閣
　　文京区新江戸川公園内
　　（電）九四一―九六四九

雁帛往来

▽事はすこし旧聞にぞくするが、関西俳句会の泰斗橋閒石師（白燕主宰）が、句集「和栲」をもって蛇笏賞を受賞された。師は無名庵方堂の弟子として、俳諧でも著名であり、故根津芦丈師との風交もあった。その高潔な人格と老艶のみずみずしさは、まさに鶏群の一鶴の感じがする。遅ればせながら師の御受賞を祝し、益々の御健吟を祈るものである。

▽俳壇では「芭蕉の新しい人間探究」がまたさかんになる兆しか、明雅師は乞われて左の各地で「芭蕉の恋句」の主題で講演をされた。

俳句講座　（聴衆　九〇人）
於東京都新宿区百人町　俳句文学館
十月十二日
第二〇回　柳井市短詩型文学祭（六〇人）
於柳井市中央公民館　十月十四日
第二十六回　千葉県俳句大会（百二〇人）
於千葉コミュニティセンター十月廿一日

▽柏連句会への招待
柏連句会は毎月第二日曜日、柏市光ヶ丘（南柏駅よりバス、光ヶ丘下車）の光ヶ丘近隣センターで、午後一時より興行している。連衆は柏近在に居住する方を中心とする立前であるが、東京あたりからの方々の参加も歓迎している。会費無料。

この会は三年前から、柏市つくしが丘の東明雅宅で行なわれ、「葛飾連句会」と称していたが、今春から場所と名称を変えて、再出発することになった。捌きは都心連句会の大林杣平宗匠にお願いしているから、猫蓑会の捌きとは同じ芦丈系の連句で、参考になるところが多い。

「季刊連句」第七号定価五百円
誌代　年二千円（送共）
発行　昭和五十九年十二月一日
編集・発行人　東　明雅
季刊「連句」発行所
〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二
電話　〇四七一（七五）一一九二
振替口座　東京　七―五二一三三
印刷所　神谷印刷株式会社
東京都豊島区高田一ノ六ノ二四
電話〇三（九八六）一七一一―五